

ボリス・グロイス
「アートとお金」

アートと金の関係は少なくとも二通りに解釈できる。一つ、アートとは、アート・マーケットに流通する作品の相対である。この場合、この20年ほどに起きたアート・マーケットの眼を見張るような発展について、まず考えが及ぶだろう。新聞が現代アートについて何か述べようとするとき、だいたい、近現代アートを扱うオークションで作品が膨大な金額で落札された、などといったニュースを伝えるのが通例である。アートはアート・マーケットという文脈に基づいて受容され、すべての作品が商品として売買されるということは疑う余地のない事実である。

一方、現代アートは常設展や企画展などの展覧会の場で展示されるという役割を担っている。ビエンナーレ、トリエンナーレ、ドクメンタ、マニフェストなどの大規模な国際展はその規模と数を増大させ続けている。こういった展覧会はコレクターやバイヤー向けではなく、一般の観客に開かれている。こうした傾向は、本来アートを購入する層に向けて開かれるアートフェアにも影響を与えており、最近のアートフェアはアートの所有にあまり関心を持っていない人に対しても開かれたイベントになりつつある。展覧会は作品売買の場ではないため、展覧会においてアートと金の関係は、マーケットの文脈におけるそれとは異なった形を取る。展覧会の場では、アートはマーケットとは無関係に展示される。それがゆえ、展覧会は、出どころが公共か民間かを問わず、支援を必要とする。

私はここで、展覧会をめぐる最近の議論では見過ごされがちな論点を強調したいと思う。そういった議論では、展覧会に出品されなくても、作品は作品として実在するものだと考えられるのが普通である。議論の焦点は、何が出品され、何が出品されないかということに向かう。それはつまり、展示されない作品も、どこか別の場所に存在しているのだという事が前提となっている。たしかに観客の目から隠れた場所に、次の展示の機会を待ちながら存在する作品もあるだろう。しかし、多くの場合、展示されないということは、制作されぬまま消えてゆくということなのだ。

実際、少なくともデュシャンのレディ・メイド以来、展示されることによって初めて実在する作品が出現した。芸術作品の制作は、何かをアートとして展示することと同義となった。展示と無関係な制作はありえないということだ。とはいえ、作品制作と展示が一致するにしても、作品がマーケットで流通することはめったにない。定義上インスタレーション作品をマーケットで流通させるのは容易でないため、経済的支援が得られない場合、インスタレーション作品は存在できない。私たちは、いわゆる伝統的な芸術作品の展覧会への支援と、インスタレーション作品の展覧会への支援との間の決定的な差異を目の当たりにしているのだ。前者は、適切な支援がない場合、大勢の観客の前で公開されることはないが、それでも作品は存在できる。後者は、適切な支援なしでは、インスタレーション作品それ自体存在できない。そのような事態は、少なくとも次のような理由によって、きわめて遺憾である。アーティストやキュレーターが創り出すインスタレーションは、同時代の一般的な趣味に異議申し立てをする、商業的な大衆文化に取り込まれない映像作家、ミュージシャン、詩人たちの関心をひきつける場になりつつあるのだ。加えて哲学者たちも自らの言説を展開する領野として、インスタレーションを見出しつつある。アートシーンは、現代のリアル・ポリティクスにおいて位置を占めることが難しい理念やプロジェクトを表明する場所となったのである。

そういった訳で、公共に開かれた展覧会は、アートと金の関係を考察するための興味深く有意義な場所なのだ。